

# 子どもが世界一幸福な国、オランダの「選べる教育」

桑原果林  
Kawahara Kari

ユニセフの2013年の調査において、世界で最も幸福度が高いとされたオランダの子どもたちは、どのような環境で、どのように学んでいるのだろうか。日蘭の両文化をよく知るアムステルダム在住の桑原果林さんが、生活体験にもとづいた「選べる教育」の実際をリポートしてくれた。

先日、今年3歳を迎える息子のために、通学圏内にある複数の小学校による合同説明会に参加してきました。オランダの義務教育が始まるのは満5歳からですが、4歳から任意で小学校に入学させることができ、3歳の誕生日を迎える頃には小学校への申し込みの案内が市役所から届きます。日本の学区制と異なり、親は好きな学校に入学希望を出すことができるのです。

ではオランダの親たちが学校選びにおいてどこに注目するかといえば、立地の次に挙げられるのが学校の基本理念です。カトリック系、プロテスタント系、イスラム系などの宗教を掲げる学校と中立系・非宗教系の学校のほかに、モンテッソーリ、ダルトン、イエナプラン、シュタイナーなどの教育法を掲げる「オルタナティブスクール」と呼ばれる学校があります。オルタナティブスクールについてここでは詳しく書けませんが、重要なのは各学校に特色があり、教育目標達成へのアプローチも様々であるということ。憲法により

教育の自由が保障されているオランダでは、それぞれの学校が任意の教材で独自の方法による教育を展開しているのです。

日本では学校選びにおいて大きな判断材料の一つとなる学費ですが、オランダでは公立も私立も16歳まで学費が無償です。アムステルダムの我が家では周囲1km以内だけで7つの小学校があり、選択肢がとても豊富なのがわかりただけでしよう。

私自身も様々な学校を見学しましたが、授業の様子を見てまず驚いたのは、先生と子どもたちの関係性でした。私が日本で学校に通っていた当時、先生は絶対的な存在という雰囲気があり、とにかく言われたことには黙って従うものだと思っていました。それに対してオランダでは、先生に自由に質問や意見ができる雰囲気がありますし、子どもたちもそうすることに慣れていきます。先生と児童がまるで対等な立場にあるかのように。こちらに住む友人の5歳の息子さん（Rくん）の話を例に挙げます。

のような、上から押し付けられる印象を児童・生徒に与える規則が思い浮かびますが、オランダの小学校を見学した際、「一緒に仲良く遊ぶこと」「定期的に互いにハグをすること」「ごめんねと言って相手を慰めること」などの決まりごとが書かれたポスターが教室内に貼ってあるのを何度か見かけました。これらのポスターに書かれているのは、互いに良い環境をつくるためにクラス全員で考えた約束だそう。こうして子どもたちが決まりごとをつくることで、より良い環境のなかでお互い楽しく過ごせることが実感でき、さらに彼ら自身がそれを守ろうという気持ちに繋がっているようです。

クラスは子どもにとってはまさに社会に相当します。子どもたちは話し合いによって社会の決まりをつくり、全員が過ごしやすい環境をつくることを学ぶわけです。このように、自分たちを取り巻く社会的環境に対して自分たちで責任をもつという体験を幼い頃から繰り返すことが、オランダ人の政治や社会問題への関心や当事者意識を生み、さらには高い国民投票率<sup>\*)</sup>を生んでいるのではないかとさえ感じます。

もう一つオランダの授業を見て印象に残ったのは、メディアやインターネットを使った授業において、その情報が正しいのかどうか、どういった視点から書かれているのか、ということに常に注意しながら進められていること。様々なメディアやインターネットにより情報が溢れている現代において、与えられた情報を鵜呑みにせず、疑う力を養うことはとても大切なことです。このように時代が求めるスキルを身につけられるところも、オランダの教育の良いところではないでしょうか。

オランダの小学校では4、5歳の子どもが教室内のパソコンやタブレットでオンライン学習をする様子も一般的。時代は違いますが、すでにWindows搭載パソコンが一般家庭に普及していたにもかかわらず、学校では画面の黒い旧型パソコンを2、3度いじっただけの私の日本での中学生時代を思うと、雲泥の差です。日本の小学校で働く現役の先生と話した際、「うちの学校ではむしろ学校の調べ

オランダには自由学習をカリキュラムに取り入れている学校が多く、この時間は子どもたちが数字の勉強、お絵かき、読書など、好きな学習を選択して行うことができます。Rくんの学校ではこの学習内容にそれぞれ定員が設けられているのですが、やはり定員以上の希望者が出る場合もあるそう。そんなときRくんや他の子どもたちは「定員以上の人数で学習することはできないのか」と先生に相談するそうです。「ルールで決まっているから」と諦めがちな聞き分けの良い日本の子どもには、あまり見られない行動ではないでしょうか。

ところでルールといえば、問題を未然に防ぐために細かく規則をつくる傾向がある日本人と違い、オランダ人は最低限の決まりしか設けません。確かにオランダの学校にも決まりはありますが、それらの目的は一般的な日本のルールとは少し違うように感じます。

日本で学校のルールといえば「下校時は寄り道しない」「メイクやマニキュアはしない」物にインターネットを使わせないようにする。あるテーマについて課題が出ると、そのテーマに関する情報を学校のパソコンからは閲覧できないようにすることもある」と聞いて驚きました。もちろんインターネットの情報だけに頼ることは望ましくありませんが、インターネットが不可欠な存在である現代において、ネット情報に対する正しい理解と疑う力を早い時期から養うことの大切さも忘れてはなりません。

オランダの教育はただ知識を伝達するだけでなく、主体性や自分で考える力など、社会が必要とされる子どもたちの能力を存分に引き出しているような印象を受けます。ただオランダの若者を見てみると、もっと協調性をもてばより円滑に物事が進むのでは、と思うような場面も実はしばしばあります。主体性に関しては、日蘭の間あたりがちょうど良いのかもしれませんが、ですから決してオランダのやり方が完璧だとか、日本でそっくり真似すべきとはいえませんが、子どもの自立を促し、多様性を尊重し、子どもが幸福な国として知られるオランダの教育には、一人ひとりがより住みやすい社会をつくるためのヒントがちりばめられているように思えるのです。私もひとりの親として、息子がこれから小学校に入ってからどんな環境を築いていくのか、今からとても楽しみです。

注 \*オランダ総選挙（下院議会選挙）の過去50年の平均投票率は約80%と非常に高い。



オランダの小学校で見かけた、決まりごとのポスター。「一緒に仲良く遊ぶこと」といった、子どもたちが自ら考えた温かい言葉が並ぶ。